毎日新聞デジタル版から

追悼

関千枝子さん

１９３２年3月２８日
～
２０２１年2月２１日

８８歳

関千枝子さんがヒロシマ原爆被害を訴える出発点となったのが本書です。８年をかけて取材し、１９８５年２月２８日に筑摩書房から刊行された本書は、第３３回日本エッセイストクラブ賞、日本ジャーナリスト会議奨励賞を受賞しました。

１９８８年に「ちくま文庫」となり、２０１５年に第９刷が刊行されています。写真は、第１版第１刷。

左は１９８５年６月２８日付毎日新聞「ひと」欄。

85.6.28

ひと

エッセイスト・クラブ賞

関千枝子さん

大阪生まれ。父の転勤で広島に。女学校二年のとき被爆。早大卒。毎日新聞に勤めたあと家庭に入り、現在全国婦人新聞記者。53歳。

旬刊の全国婦人新聞記者。現在病気で倒れた編集長の代わりを務めながら、十日にいっぺんコラムを一本、書評を二本、一般記事を二―三本書き、担当している連載が四本、というのである。そのかたわら九年がかりで書いたドキュメント『広島第二県女二年西組』（筑摩書房）が今年の日本エッセイスト・クラブ賞を受賞した。

「去年の四月初めに原稿書き上げて、やっと書けたと、すぐ出版社へ。八月六日に間に合うと思ったわけ。そしたら来年はちょうど被爆四十周年、手を入れて来年出しましょうということになって今年二月に本に。手を入れているさいちゅうに三十九年目に遺骨が見つかったケースが。何でこんな時間がたってと、広島を知らない人には信じられないでしょうが」

二年西組四十五人。うち三十九人が爆心地から一・一キロで勤労動員中。三十八人が亡くなった。下痢が理由の関さんら計六人が欠席して命拾いしたが、関さんはその三十九人の級友と三人の先生の被爆状況をつづっているのである。

「助かった一人として、物書きなのに何もしていない自責にかられて」と言う。第二県女は廃校になって記録もない。電話帳を頼りに住所を調べ、毎年八月、広島へ旅して、その遺族を訪ね歩いた。遺族は、娘の友達が訪ねてくれたというので、新聞記者では聞けないだろう話までしてくれた。

「でも、どんなに私が書いても原爆には幽が立たない。本物はもっとすごい。あのころでさえですから、今のはもっとこわいはず」

ノー・モア原爆の記録なのである。今、「パートのおばさんくらいの月給」で働いているという。その理由、「私にあった仕事が他にないからですよ」と言うが、たくましい人だ。（本間　義人）

２０２１年3月２０日　春彼岸に

天声人語

関千枝子さんが書いた『広島第二県女二年西組』を読み、今なお戦時中の負い目を感じながら生きている人がいかにたくさんいるか、ということを教えられた▼動労動員で働いていた級友三十八人は原爆で死んだ。引率の女教師二人も死んだ。その日たまたま学校を休んで助かった関さんは、自分が助かったことの負い目をかかえながら生き続けている▼「この思いを、原爆の生き残りは『すまない』という言葉で表現する。自分が原爆を落したわけでもないのに、なぜこんな思いを……と割り切れぬ憤懣を抱きながら、やはり『すまない』という」▼関さんは級友や恩師の最期を調べ続けた。ある級友の母親は、焼けただれた娘に、心ゆくまで水を飲ませてやらなかったことを悔い、ある姉は、妹を抱いてやれなかったことを悔いている▼評判の美少女だった妹は焼けてどろどろの姿になり、抱いてといわれても、抱いてやれなかった。口のあたりがただれていて、すまし汁を飲ませると痛がった。「今でもすまし汁を飲むたびに涙が出る。なんてひどいことをしてしまったのだろう」と姉はいう▼ある教師は、同僚の女教師の遺体を運ぼうとして、運べなかったことに負い目をもっている。女教師は肉の内側まで火が通るやけどを負いながら、母鳥がひな鳥を守るように両わきに教え子をかかえて歩き、力つきて倒れた。二十九歳の女教師の髪は一瞬にして白髪になっていたという▼その遺体に軽くふれただけなのに、二の腕の肉がひとかたまり、ポロッと転げおちた。教師はそれ以上「手をふれることができなかった」と当時の模様を語りたがらない▼負い目をもつとは、過去のできごとにこだわり続けるということだろうか。過去の負い目を忘れたがる人があまりにも多い昨今だが、こだわるべきものにこだわり続けなければ、十三、四歳で死んだ級友や恩師の魂を慰めることはできない。そんな思いがこの力作の背景にある。

朝日新聞「天声人語」
１９８５年4月２９日

話題　この人

『広島第二県女二年西組』でエッセイスト・クラブ賞を受賞した

関（せき）千枝子（ちえこ）さん

「私がほめられていいのかしら、と困っちゃう感じで…」

第33回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞した気持ちをこう語る関さん。受賞作『広島第二県女二年西組―原爆で死んだ級友たち』（筑摩書房）は、四十年前の八月六日、広島市内で建物疎開作業に動員された先で被爆した級友たちの状況をたどった記録です。

爆心から一・一キロの地点、四十五人のうち欠席者を除く三十八人がその月二十日までに死亡。下痢で休んでいた関さんは「奇跡的に」助かりました。

全国婦人新聞記者。横浜市在住。53歳

「生き残った者と亡くなった者とは紙一重なんですよね。ともかく書き終えてホッとしたでしょうと、よくいわれましたが、〝返り血〟を浴びたみたい、といったらいいか、書いても書いても相手（原爆）が大き過ぎて…。三十九年ぶりに遺骨が遺族のもとに届いた例もありました。どうして、と思われるでしょうけど、これが原爆というものなんですね」

当時十三歳～十五歳の少女たちが〝お国のために〟と殉国精神に貫かれて逝（い）ったたいけなさ。その級友たちが〝靖国の神〟として合祀されていることへの大きな疑問符を関さんは本書の中に突きつけています。

「そうとうリアクションがあるかもしれないけど、思い切って書きました。ええ、遺族の方には全部お届けしました」

級友の被爆記録収集を思い立ったのは九年前。以来、仕事の傍ら遺族を捜し訪ね歩いた執念の人です。

「何を尋ねてもひとともしゃべらない遺族の方もありました。いうも地獄、いわぬも地獄ですね。核兵器は廃絶するしかないと思います」（紀）

しんぶん赤旗
「話題　この人」
１９８５年7月１１日

毎日新聞の仲間たちが開いた『広島第二県女二年西組―原爆で死んだ旧友たち』出版を祝う会。
前列左から３人目が関さん
１９８５年8月2日　神田・おけい

狩野美智子×関千枝子

出版記念対談

2012 年 10 月 7 日

Space&cafe ポレポレ座(東中野)

左上＝発言する板垣まさるさん
左下＝池田龍夫さん

右下＝中学 2 年の時、天皇制に疑問を持った関さんが作成したという歴代天皇の系図

読ん得

今、平和を語る

ノンフィクションライター――関 千枝子さん

聞き手――広岩 近広

被爆63年…年々深まる心の傷

70歳超えて、被爆死した同級生の夢をよく見る。
勤労奉仕で逝った友の靖国合祀は耐えられない。
美しい言葉と共にくる戦争にだまされないで。
来年のNPT会議へ向けて、運動の輪広げたい。

被爆者であり、「広島第二県女二年西組――原爆で死んだ級友たち」（ちくま文庫）の著者として知られる関千枝子さん(76)は、歳月を重ねるにつけ「原爆による心の傷」は深まっていくと自身の体験から語る。戦争と原爆がもたらした原罪を、関さんに聞いた。

せき・ちえこ　1932年大阪市生まれ。早稲田大学文学部卒業後、毎日新聞記者を経て全国婦人新聞（女性ニューズ）編集長。現在、執筆、講演を続けている。85年に出版した「広島第二県女二年西組」で日本エッセイスト倶楽部賞を受賞。同書の12人の記録が、昨年ドイツで刊行された「原爆地獄　ヒロシマ」（河勝重美・編）に再録されている。「この国は恐ろしい国」（農文協）「若葉出づる頃」（西田書店）など著書多数。

――阪神大震災を契機にPTSD（心的外傷後ストレス障害）が注目されるようになりました。関さんは、原爆で受けた「心の傷」が70歳を過ぎてから、より深くなったと書いています。

関　70歳を超えてから、夜明けが早くなる季節になると、毎日のように同じ夢を見るようになりました。私の名を呼ぶ声が耳元で響くのです。あの日の朝、私を誘いに来た同級生の美智子さんの声です。夢の中で、私は「ごめんね」とつぶやいています。

――関さんの同級生とは、強制開地の後片付け作業に動員された「広島第二県女二年西組」の女生徒で、美智子さんは亡くなった38人の1人ですね。

関　そうです。私の同級生だけでなく、広島の中学、女学校の低学年生も死にました。12歳から14歳の子どもが約7000人もです。炎天下の労働作業を、それも子どもたちがしていたのです。私が助かったのは、その日、下痢をして休んだからです。原爆投下が1日早ければ間違いなく私は死んでいた。でもこれを単純に「幸運だった」と喜べないのです。広島の人は、生き残ったことを「すまない」と言います。自分が原爆を落としたわけではないのに。

原子爆弾による被害は熱線、爆風、放射線と言われてきましたが、私は「心の傷」を加えるべきだと思います。ですが、心の傷は当事者以外にはわかりにくい。生き残りの思い込みのようにとられがちです。

実はこの問題は一昨年、精神科医の中沢正夫さんが著書「ヒバクシャの心の傷を追って」（岩波書店）で問題提起されました。すべての被爆者は「心の傷」を負っている。何十年たっても癒やされることがなく、むしろ深まってゆき、個人的なできごとの比重が増すと言われています。私もその通りだと思いました。

――とても深刻です。

関　同窓会主催の集まりで、ある下級生が言った言葉を忘れられません。「原爆って、どうしてこんなにつらいのでしょう。30年たっても、40年たっても悲しい。普通の法事だと三十三回忌は親戚の社交場で、笑い声がするのに、原爆では涙しかない」。その通りで、50年の慰霊祭も60年の慰霊祭も遺族たちは泣きました。

美智子さんの話に戻ると、無残な死に方をした大切な友に何一つ役立つことができなかった悔いは、月日がたつほど深くなるのです。被爆者の「心の傷」が癒えることがあるとすれば、それは核兵器が廃絶され、絶対平和が確立されたときだと私は言っております。

――被爆者は核兵器廃絶と恒久平和を訴え続けてきました。

関　平和憲法の戦争放棄と絶対平和の理念は、被爆者の「心の傷」から生まれた思想だと言えるのではないでしょうか。

昨年暮れ、核兵器廃絶の署名に取り組みました。2010年の国連のNPT（核拡散防止条約）再検討会議に向けてのもので、平和市長会議（議長・広島市長）の要請を受けて生協が協力するというので、私も参加しました。「核兵器廃絶」と叫ぶことは自由にできますが、本当に廃絶しようとすれば、国連でやるしかないのです。その国連に私たち民衆が訴える方法は署名しかないではありませんか。

私が直接、署名をいただける人はせいぜい数十人と思い知人に手紙を出して協力を頼みました。30人くらいにしか出さなかったのですが、多くの人が署名用紙を自分でコピーし、さらに自分の友だちにまた頼むといった具合で署名の輪が広がり、なんと550人も集まったのです。添えられた手紙には、「この署名は誰一人断る人がおらずうれしかった」など書いてあり、私は改めて核兵器廃絶は日本の民意と確信しました。

「戦争をなくさない限り核兵器はなくならない」と言う人もいます。しかし、だからこそ核兵器廃絶と非武装平和主義（憲法9条）は統一した目標であり、願いなのです。核兵器は人類の生んだ最悪の凶器であり人類と絶対に共存できないものですから。オバマ大統領は就任演説で「核の脅威を減らすために絶えず努力する」と言いました。アメリカも変わってきています。2010年NPT再検討会議は重要な会議になることでしょう。これに向け、もっと大きな運動をと思っております。

――ところで関さんは、友人が靖国神社に合祀されていることにこだわっておられるようですが、どういうことなのでしょうか。

関　強制疎開地の後片付け作業で死んだ少年少女たちは、「英霊」として靖国神社に合祀されています。私たちは戦中、死ぬことこそが臣民の道と教えられ、戦死して靖国神社に祀られることは名誉と讃えられました。靖国神社は死を悼むところではありません。私たちが疑うことを知らずに軍国少女になったのは国家神道による皇国精神であり、その先鋒が靖国神社でした。被爆死した友は戦争の犠牲者であり、戦の神社の軍神にされているのは、私には耐えられません。

――最後に、戦争と女性のかかわりについて。

関　私は1932（昭和7）年3月、満州事変勃発の半年後、大阪・築港で生まれました。その同じ3月、築港の地で生まれたのが国防婦人会でした。出征兵士に湯茶の接待をして見送った。善意の主婦たちのボランティアが、割烹着にタスキがけ、戦争を支える銃後の女性の大集団となったのです。女性は律義でまじめなので、とにかく一生懸命になる。この懸命さが時には恐ろしいことになります。

戦争は美しい言葉とともにやってきます。「正義」とか「国益」とか、時には「平和」という言葉まで。だまされないことです。

（専門編集委員）

05年5月のNPT再検討会議の決裂に抗議して座り込む被爆者ら
＝広島市中区の平和記念公園で

核兵器廃絶と非武装平和主義の確立を

次回の「今、平和を語る」は3月16日に掲載予定

■「読ん得」へご意見、ご感想を　osaka.yukan@mbx.mainichi.co.jp　ファクス06・6346・8106

２００９年２月２３日　大阪毎日新聞夕刊

（右面下から）

除外された死者

被爆70年の昨年、関さんは新たに本を出版しました。建物疎開に動員された人数に比べ、死者数が極端に少ない事例があることを取り上げました。その理由の一つとして、死者数に朝鮮半島出身者が含まれていないことが分かりました。

「国は、遺族年金や恩給を支給しないために外国人を戦死者から除外した。建物疎開をしていて亡くなった子は5846人といわれています。しかし実際の犠牲生徒数は6000人を超えると思う。原爆の犠牲者なのに、みんなが忘れてしまったまま戦後70年以上放置されてきたことになります」

関さんは核廃絶への思いを語ります。

「廃絶への道筋は分かっています。核廃絶条約をつくり世界各国が批准することです」

しんぶん赤旗　日曜版
２０１６年８月７日

広島原爆
焼かれた級友
皮膚がはげ、横たわる
体験した私が伝えたい

71年前の8月6日、広島に投下された一発の原子爆弾が、建物疎開作業に駆り出されていた少年・少女約6000人の命を奪いました。同級生の8割を原爆で失った作家の関千枝子さん(84)は「同級生たちは目の前で苦しみながら死んでいきました。生き残った私が、この悲劇を伝えなくては」と体験を語り続けています。　藤川良太記者

作家　関千枝子さん(84)

広島市の平和記念公園を中心に東西に延びる道幅100㍍の平和大通り。道の両脇の広い歩道は街路樹が生い茂ります。関さんは今年も「原爆の日」を前に、フィールドワークで、この道路周辺に立つ慰霊碑を回ります。

「この道路を造ったのは今の中学1、2年生にあたる少年少女です。原爆はその子たちの命を奪いました」

道路はもともと、空襲による火災が広がるのを防ぐ防火帯でした。第2次大戦末期の1945年、強制的に建物を取り壊す建物疎開で整備されました。作業に動員されたのは10代の少年・少女でした。

8月6日。午前8時でも照り付ける真夏の太陽は暑かったといいます。関さんが通っていた県立広島第二高等女学校2年西組の同級生39人は、爆心地から南1・1㌔の雑魚場(ざこば)町(現・国泰寺町)で建物疎開の作業をしていました。関さんは下痢で作業を休み、自宅で寝ていました。

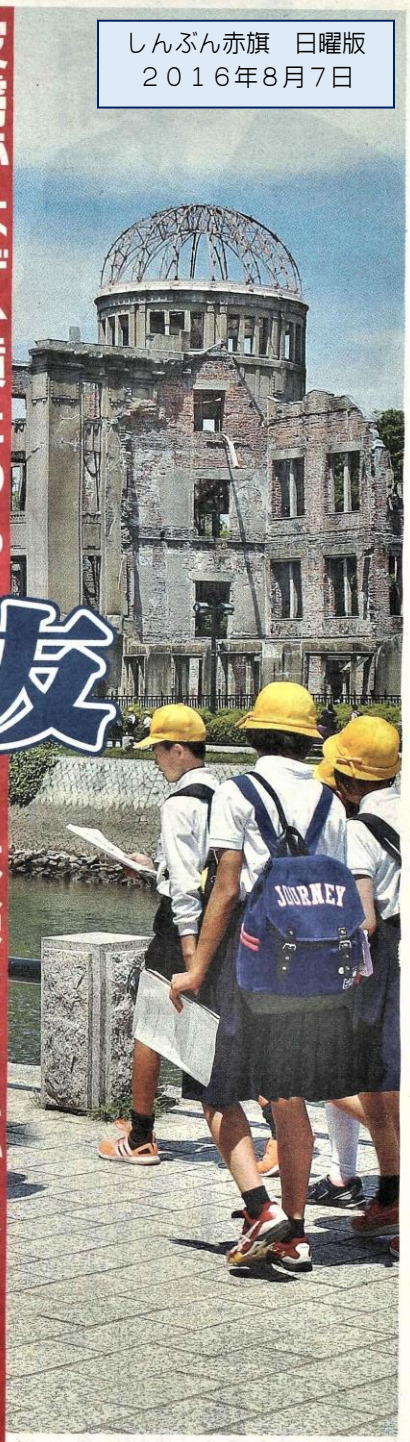
原爆投下で閃光(せんこう)に包まれた広島市。熱線で地表温度は約4000度にも達し、爆風や放射線によって死の街と化しました。爆心地から南東3㌔の自宅にいて無事だった関さんは翌日、歩いてすぐの学校に駆けつけました。

教室に足を踏み入れると、立ち尽くしました。焼けただれ、顔が膨れ上がり、皮膚がはげ落ちた人たちが並んで寝かされていたからです。その一人に「富永さん(関さんの旧姓)」と不意に声をかけられました。その声で同級生の一人だと分かりました。傍らの母親にかける言葉は見つかりませんでした。

「やれることは何もありませんでした。ただ、おろおろするだけ。みんな苦しみながら死んでいったのです。原爆の被害を繰り返さないためには核兵器廃絶しかない。そのためにも今年、被爆者が始めた国際署名を集めたい」

6面につづく

関さんのフィールドワークで訪れる、平和大通り沿いの被爆動員学徒慰霊慈母観音像



多くの子どもたちが学校行事で訪れる原爆ドーム

1面のつづき

広島の原爆投下では14万人が亡くなりました。約6000人の原爆犠牲者が出た建物疎開。多くの同級生を亡くした関千枝子さん(84)は語ります。

「教育現場でこれほど多くの子どもが亡くなった日本教育史上最大の非人道的悲劇を忘れさせてはいけない」

関さんが通っていた県立広島第二高等女学校。原爆投下後、建物疎開作業をしていた同校の生徒たちが運び込まれ、救護所となりました。関さんはそこに毎日通いました。

「学校を休んで生き残った罪悪感で、行かずにいられなかった」

関さんは原爆投下から40年後の1985年、同級生たちの最後の姿を取材し、本にまとめました。その中では、顔の原型をとどめないほど焼けた自分の子どもを見て「これは私の子どもではありません」と叫んだ同級生の母親の話や、全身を焼かれながら生徒を背負い病院にたどり着き息絶えた担任の先生の話もつづりました。

同じクラスの同級生は46人。当日、建物疎開をしていた39人中38人が原爆投下から2週間後の8月20日までに亡くなりました。関さんら欠席していた7人は助かりました。建物疎開に参加しながら生き残った1人も、24年後の69年に37歳の若さで胃がんで亡くなりました。

取材する中で新たに知り、驚いたことがありました。国民を侵略戦争に動員する上で重要な役割を担った靖国神社に同級生が「英霊」として祀(まつ)られていたことです。

「私は、あぜんとしました。当時は、命を惜しまずたたかうのが日本人で、死ねば英霊として靖国の神となると教えられました。靖国は国のために命をささげろと言って侵略戦争を進めた場所です。同級生は侵略戦争の神となったのではなく、原爆の犠牲者です」

(左面下へ)

「全国婦人新聞」時代とその後

平正こと平野正夫さん 27 回忌に結集し、遺族に寄添った老後輩たち。後列左から２人目が軸となった関千枝子さん。平正は、「社会部３平野」と称された毎日新聞きっての名文家で、新旧分離のおり、自ら老兵は去るといって合理化解雇に応じ、自力で「全国婦人新聞」に再就職し、そこで社会部の後輩である関千枝子と席を改めての先輩・後輩となった。

関さんは、平正から２度めの薫陶をうけ、平正に次いで、同新聞の編集長を務めている。平正没後は、その供養に篤く、毎忌、後輩群を主導し、27 回忌に至っている。写真は 2011 年 10 月、岩手県花巻の菩提寺での法事後、普段着に着替えての後楽に出発する貸し切りバス前での全員集合。中で若き女性は「全国婦人新聞」の後輩たち。　（大住広人）

安倍靖国参拝違憲訴訟で原告団団長に

2013 年 12 月、当時の安倍首相は靖国神社に参拝した。これに対して、宗教者、平和遺族会代表ら 274 人が、安倍首相・国・靖国神社に対して、原告一人あたり 1 万円の損害賠償とともに、首相の靖国参拝が憲法違反であることの確認と、今後の参拝差し止めを求めて、2014 年 4 月 21 日、東京地裁に提訴しました。　関千枝子さんはこの原告団の団長でした。

同日午後 3 時半から司法記者クラブで開かれた記者会見で、関さんは次のように訴えました。

私は広島の被爆者です。クラスメートは動員されて作業中被爆し、全滅しました。私はたまたまこの日休んでいたので生き残ったのですが、そのクラスメートたちが靖国に合祀されたということをきいて、愕然としました。もし私があのときに死んでいたら、「靖国の英霊」になっていたわけで、それはいやだと思いました。それからずっとこの問題を考えています。

私は憲法の「政教分離」ということを、９条と並ぶ大切なものだと思ってこだわっています。かつての日本は「祭政一致」で、すべての宗教の上に国家神道がありました。国家神道の教えとしてあの戦争は聖戦であり、国のために死ぬことは誉れだと教えられてきたのです。それがどんなに恐ろしい間違いだったか。

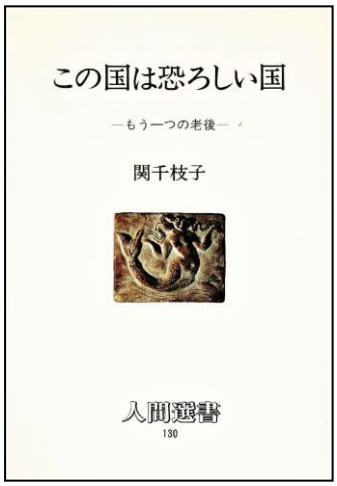
安倍さんの言う「戦後レジームからの脱却」、それが凝縮されているのが今回の靖国参拝だと思っているのです。今回の訴訟には、宗教者の方も熱心に取り組まれていますが、私たちのような、宗教者ではない一般市民も、多くの原告に加わっていただいています。

＊

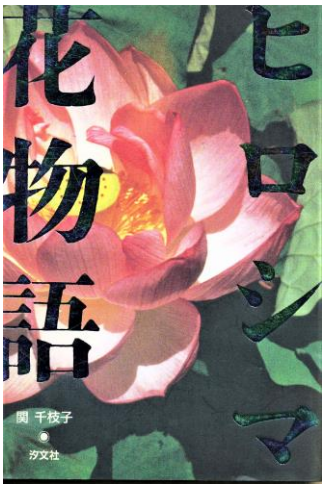
「安倍靖国参拝違憲訴訟・東京」は、2019 年 11 月 21 日、最高裁の上告棄却と不受理決定により終結し、「安倍靖国参拝違憲訴訟の会」は解散しました。

関さんに呼びかけられて、私も原告団の一人になりました。団長としてこの裁判闘争を闘い抜いた関千枝子さんの努力を讃えたいと思います。

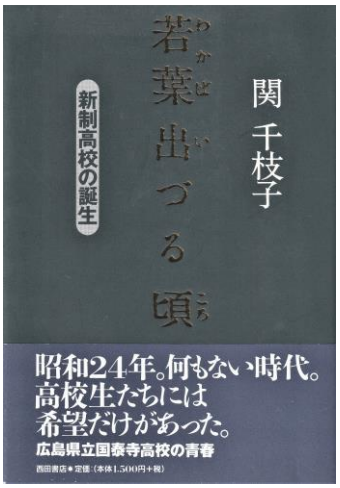
（福島　清）



1988 年 10 月 30 日
農山漁村文化協会



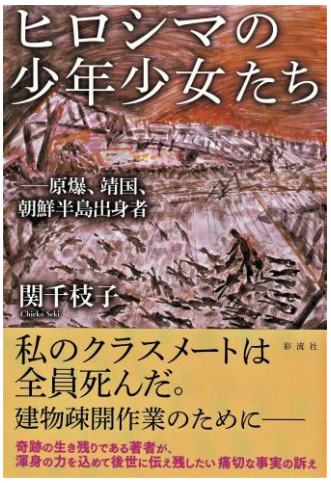
1990 年 7 月 16 日
汐文社



2000 年 6 月 10 日
西田書店

2009 年 11 月 6 日
岩波書店

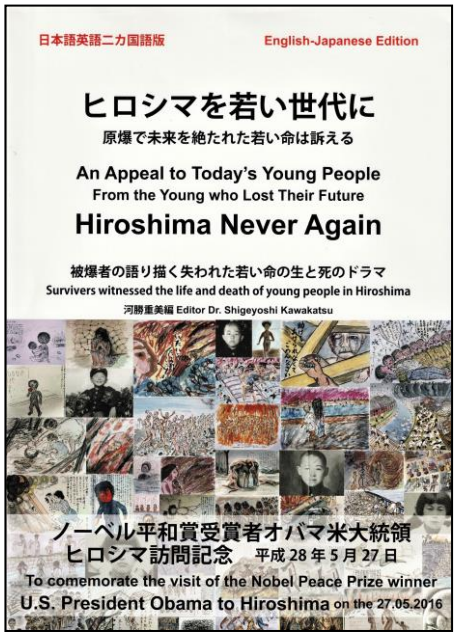
2012 年 10 月 31 日
彩流社



2015 年 8 月 26 日
彩流社

2015 年 11 月 20 日
西田書店

2016 年 6 月 1 日
西田書店



2016 年 5 月 27 日のオバマ米大統領ヒロシマ訪問日に、河勝重勝氏が日英両語で発行した本書には、関千枝子さんの「広島第二県女二年西組」の原爆で死んだ旧友たちが引用掲載されています。

2010年4月4日（日曜日）　しんぶん　赤　旗

本と人と

『ルポ　母子家庭
「母」の老後、「子」のこれから』

関（せき）　千枝子（ちえこ）さん

貧困の連鎖。怖い時代です

毎日新聞社に13年勤め、夫の海外赴任に伴い離職。その後、離婚して全国婦人新聞に再就職しました。3人の子を抱え、零細の新聞社の薄給。当事者として1983年から母子家庭の取材をしています。低賃金と差別の中にある母子家庭の問題は、女性の貧困の問題が凝縮していると考えたからです。自身の離別や生活の苦しさもさらしながら、現状を告発してきたと振り返ります。

「20年前に比べて、雇用の状況はずっと悪くなっています。生保世帯の母子加算の問題は、関心と共感をよびましたが、〝母子家庭の命綱〟である児童扶養手当の問題は、忘れられているようでしょう？」

「母子家庭は、女性全体の低賃金の中、昔から低賃金だった。そしてここ数年、新自由主義は女性たちの雇用を直撃しています」

20年前に取材した母たちに再会すると、年金だけで暮らせている人は少ない。現役の母たちは非正規雇用のワーキング・プア。その子どもたちは、公立でさえ異常にお金がかかる競争的な学校教育で早々に振り落とされ、社会に放り出されます。

「貧困の連鎖です。ものすごく怖い時代ですよ。このままにしていたら、ひどいことになる」

2002年の改悪によって児童扶養手当は、支給5年ないし7年後から半減とされました。

「あまりにも母子家庭の実情とかけ離れているとの世論に、今は一応〝凍結〟されていますが、いつまた復活するか分からない。少なくともこの条文だけは早急に削除しないと大変なことになります。母子家庭問題は、ひとごとではなく女性の貧困の問題として考えていただきたいのです」（田中佐知子）

（岩波書店・1600円）

1932年生まれ。ノンフィクションライター。『この国は恐ろしい国—もう一つの老後』

吉武克郎撮影

中国の「反日デモ」報道に　1930年代を思う

関　千枝子

４月、テレビのニュースを見ていた私は目を疑った。昨年の中国の反日デモの一周年ということで、当時の映像を長々と流していたのである。なんで今頃、あの映像。「小泉首相の靖国参拝に罰を出す中国の行き過ぎたナショナリズム」を非難し、反中国気分を盛り上げようという意図としか思えない。

昨年のデモの時、中国の反日デモの暴力性（たしかに投石などがあった）が散々言われ、中国内の失政への不満をそらすためと言われた。その前、重慶でのサッカー試合でのマナーの悪さもあって、なんと中国はひどい国なのだろうという気分をふりまいた。

たしかに暴力的な行為は、いいとは言えない。しかし、なぜそれだけの人がデモに集まったか。自国への批判をそらすためというが、たとえば、ぃま、中国で、反シンガポールデモや、反韓国デモをしようと呼びかけても成功するとは思えない。

小泉首相の靖国神社参拝や、「つくる会」教科書などにはっきりあらわれる戦争への無反省への怒りが、あのデモになったので、このことを棚上げにしたデモ批判は恐ろしい。反日デモの報道を見て、あっと思ったのは、昭和初期と実に良く似ていることだ。

日本の中国への侵略は、１９３１（昭和６）年９月、「満州事変」となり、以来１５年の戦争となる。抗日の気運は日々高まるが、日本はそれに何と言ったか。「暴支膺懲（悪い支那をこらしめる）」と言ったのである。

日中戦争を支持した「有識婦人」たち

１９３１（昭和６）年１１月の東京朝日新聞の家庭欄は「婦人の立場から満州事変を観る。この非常時に臨む　婦人の感想と批判」を特集、「有識婦人」４人に意見を聞いている。このなかで平塚らいてうは「支那側が悪いとか、日本側が悪いとかいったことよりも、もっと大きな人類的立場から、何かすることは無いものかと思っています…どうしても日本民族が生存する上に、満蒙というものがなくてはならぬものである以上、正義にかなった主張を立派に全世界に対して出来るはずだと思います」

高良とみは「日華関係については、１０年来婦人としても責任あります。この責任を果たさないうちに、今日の様な関係になったことは誠に残念です。……とにかく、今は、日本が、平和と正義の支持者であることを世界にはっきりさせる時であります」。

市川房枝は「国際的紛争は、武力でなく、平和的手段で解決したいと思いますが、現在のようになってしまってこれ以上拡大しないで解決することが急務だと思います」。二人が婉曲な言い方だが、「平和的解決」を一応言っていることに注目する。しかし、最も進歩派の彼女たちが「満州は生命線」という国の宣伝をそのまま受け入れ、「日本の平和と正義」をうけいれているのには慄然とする。

もうひとり、吉岡弥生となると、挙国一致で事にあたれと勇ましい。「先方（注＝中国）では、小学校の教科書にまで、排日思想を盛ったりして、小さな子供なら日本を悪しざまにうえつけています。これでは、いくら正義をもって進んでも、先方で受け入れなければ、干戈を交えることもやむをえないことです」。先頃の反日デモのころの論調を思い出しませんか？

日露戦争のとき、「君死にたまふことなかれ」と反戦をうたった与謝野晶子は、上海事変の視察に行き、塹壕に、るいるいと横たわる中国人学生の死体をみて「なんでわが国の真意を解さないのか」と悲しむ。よその国に攻め入って、愧儡国家をつくっても、日本はあくまで正義なのである。

満州事変のころ、まだ、「平和的解決」を言っていた人も、日中戦争が始まるころにはすっかり声をひそめてしまうのだ。

戦後生まれの人々が、「昔は〝平和〟などと口にも出せなかったのですね」などとさも訳知り顔にいう。「とんでもない。太平洋戦争期に入つてからはそうだけれども、日中戦争のころ、平和、平和のオンパレードだったのよ」というと、妙な顔をする。だが本当にそうなのだ。「東洋平和のためならば……何で命が惜しかろう」と私たちは歌った。つねに戦争をするいいわけは、平和のため、正義のためである。侵略のため、戦争のために戦争をするなどという人はいない。

陸軍の港だった「築港」と「宇品」にこだわる

私は、　１９３２年、大阪の築港というところで生まれた。築港は陸軍の港。満州事変で大陸に送り出される兵士で港はいっぱいになった。「兵隊さん、ご苦労さん」と思った主婦たちの中で、ヤカンと湯飲みを持って港に行く人がいた。せめて、お茶でもあげようというのである。彼女らは、〝お国のために〟戦場におもむく兵士たちに何かしてあげたいとの「善意」そのものであった。主婦たちの数は増えつづけ、大運動

となり、１９３２年の３月、大阪築港の地で一つの婦人団体が生まれた。「国防婦人会」である。その一週間後、私は、この「築港」で生まれた。

２年半後、戦前最大といわれる大台風・室戸台風が襲う。最大の被害地が大阪市築港であつた。この台風の凄まじさは私も母に聞かされよく承知している。台風のあと、風と水でメチャメチャになった築港にバケツと雑巾を持っていち早くかけつけ、庶民の家の後片付けを手伝ったのが、国防婦人会の女たちであった。彼女らの献身的な働きは、感謝と称賛の的になり、国防婦人会の会員は増えつづけ、あっというまに日本最大の婦人会となり、「銃後」を支える女集団が形成されるのだ。

私は、かなり年を重ねてからだが、この築港に生まれたことにこだわるようになった。そしてなぜ、私が広島の字品で敗戦の日を迎えたかも。築港も宇品も陸軍の港である。外地に行く兵隊を送り出す港であった。私の父は陸軍と組んで強大になった財閥会社の社員であり、だからこそ、築港、字品にいたのである。私はこのことに、こだわりつづけている。

戦争賛美の替え歌と自慢話

子供のころ、歌っていた「歌」がある。女の子たちはこれを「毬つき歌」として節をつけて歌っていた。私はもちろん、大阪でこの歌を覚えたのだが、広島とか、他の地方で育った人も同じ歌（あるいは殆ど同じ歌、なにしろ、耳で覚えた記憶だから）を知っているところを見ると（男の子も知っていた）、全国的に流布されていたようだ。「スズメ　メジロ　ロシヤ　ヤバンコク　クロパトキン　キンノタマ　マケテカエルハチャチャンボ　ボウデウツノハイヌコロシ　シベリアテツドウナガイケド　ドビンノクチカラユゲダセババルチックカンタイゼンメツス」そして、スズメと戻っていく。かなり品の悪い言葉もあり、差別用語もあり気がひけるが。チャンチャンボは中国人の蔑称。チャンコロと同じである。

こんな「歌」を日常くちずさみつつ、ロシアをやっつけた日本は強い、「支那」は弱くて負けてばかりなのに悪いやつ、という考えを、知らず知らずたたき込まれていった。

ある友が言っていた。「私は兵隊さんが中国人を一人でも多く殺すほど、日本人が幸せになると思っていたよ」

戦前、あの時代も、私たちは「戦争の話」を聞いていた。主にそれは傷疾軍人の見舞いに行ったときで、いかに中国兵をやっつけたかという自慢話だった。日本国内が戦場となったことがない私たちは、戦争がどんなにひどいものかまったくわからなかった。殺された中国兵、彼に家族がいることだって想像もしなかったのだ。

反日デモをする中国人に反感を覚えるという学生たちに言った。「中国は、日本の侵略のために１２年間も、自分の国土を戦場にされていたのよ。それがどんなに大変なことなのかわかる？」。日本中が空襲で丸焼けになったこと。この期間は戦争の最後の半年間で意外に期間的には短いのだが、自分の住んでいる街が焼かれ、死の恐怖を味わった人々は、決してこのことを忘れないということを話し､「中国の人は１２年、この苦しみを味わったのよ。サッカーの応援のマナーの悪さを言われた重慶、あそこは戦争中、臨時の首都にしたところ。日本軍はあそこに連日猛烈な空襲をした。市民を殺すことを目的とした空爆のハシリともいわれ、その回数実に１５０回とか言われています。そんな目にあった市民たちが、そのことを忘れると思いますか？」と聞く。学生たちはびっくりして、「そんな話ははじめて聞いた。そういわれると、いちがいに中国人を非難できないね」などと言い出す。中には中国と戦争をしたことも知らない学生もいる。

中国反日デモを「非難」する資格があるか

近代史についてあまりに無知、歴史認識のなさに驚く。あるいは、中国の反日デモ、ナショナリズムについて「非難する」現役の新聞、放送人たちも大同小異の認識ではないかと思うと、肌寒くなるのだ。

もっとも、現役世代のみを笑えないかもしれない。昨年、私の小学校の同級生で卒業６０周年記念の文集「戦時下のこと｣をつくった。４０人１クラスの組で、亡くなった人もあり、健康を害している人もあり、書ける人は３０人くらい、手記が１２人もあつたらいいと思っていたのに２５人も集まった。２０枚、３０枚の大原稿もあって、皆の記憶の確かさ、忘れられない戦争の辛さを思い、感動したのだが、中に２、３人、昭和１６（１９４１）年１２月８日の思い出について「この日まで私たちは平和で楽しい暮らしをしていたのに、……」と書いた人がいた。太平洋戦争期まで中国との戦争は、私と同年齢の友までが忘れてしまう程度のことだったのだ。よその国でやっている戦争だったから。

戦争を全く知らない「大人たち」に戦争の悲惨さを理解してもらうのは並大抵のことではない。しかし、戦争を知っている大人たちでさえ、認識が十分であるとはいえない。真実を見つめ、伝えることの難しさを思いながら、いまの世の中が１９３０年代、昭和初期に似ていることの恐ろしさを感じる。

関千枝子さん 毎日新聞在社時代のひとこま

新聞労連青年婦人協議会全国代表者会議

１９６１年8月１３～１５日（山中湖）、左から毎日新聞労組本部青年部長・柳沢勇さん、同婦人部長・関千枝子さん、東京支部青年部長・田中圀さん、青年部員・久保田博さん。

上＝山中湖上のボートで。前は田中圀さん。

下＝右から関さん、田中圀さん、三宅茂樹さん（大阪）、福島清

有楽町時代の毎日新聞社

中国新聞工作者代表団を招いて交流

１９６１年8月１４日から約一か月、新聞労連、日本ジャーナリスト会議、出版労協などが、中国新聞工作者代表団４人をカンパで招待して全国各地を回って交流し、９月５日、「米帝国主義は共通の敵」との共同声明を発表しました。

８月末、朝日新聞社内を見学後、歩いて毎日新聞へ代表団を案内した関さん。上は朝日新聞社横、中は毎日新聞社玄関。下は、活版職場を案内する関さん。漢字テレタイプ送稿が始まったころで、後方には活字ケースが並んでいます。

毎日新聞ＯＢたちと重ねた交流の日々

関千枝子さんの毎日新聞時代は１３年間でした。しかし退社後もジャーナリストの原点であった毎日新聞時代の仲間との交流を大切にされていました。

１９８５年に「広島第二県女二年西組」を上梓して以後、ヒロシマ原爆被爆者として、核兵器禁止を本格的に訴え始めました。その２年後の１９８７回からスタートした毎日新聞ＯＢ達の「無名会」と称した交流会には、第１回から参加し、２０回のうち欠席したのは、わずか３回だけでした。

「無名会」に参加し続けたのは、ジャーナリストとしての原点であった毎日新聞への愛着と仲間たちを大切にする思いからだったと思います。懇親会の席では、ヒロシマ被爆者のことはほとんど話さなかったように思います。人間として交流することを何よりも大切にしようという思いがあったからではないかと、今、思い起しています。

◇第１回＝千葉県・館山（1987 年 10 月 31～11 月 1 日）有井民安、飯泉栄次郎、井口昭夫、板垣保、内山博、勝又敏夫、加藤親至、加藤暢彦、黒岩義之、小峰澄夫、関千枝子、高内俊一、戸塚章介、西田瑞穂、外立亮一、山野井孝有〔西部〕奥田正

◇第２回＝毎日新聞健保組合強羅保養所（1988 年 10 月 23～24 日）有井民安、飯泉栄次郎、井口昭夫、板垣保、内山博、勝又敏夫、加藤親至、加藤暢彦、黒岩義之、小峰澄夫、関千枝子、高内俊一、戸塚章介、西田瑞穂、外立亮一、福島清、山野井孝有〔西部〕奥田正

◇第５回＝北九州市・毎日健保組合めかり保養所（1991 年 10 月 5～6 日）〔東京〕有井民安、飯泉栄次郎、井口昭夫、加藤親至、黒岩義之、鈴木利人、関千枝子、戸塚章介、外立亮一、橋本保治、山野井孝有〔大阪〕近藤隆之輔、浜田禎三、三宅茂樹〔中部〕柘植忠芳、同夫人、吉田哲郎〔西部〕鵜狩照夫、奥田正、河野春人、佐田孝雄、白石博基、杉原光興、谷川輝夫、坪島信幸、福井浩平、松尾礼次郎、村岡実、森田稔、原武志

◇最終回の「無名会」となった第 20 回＝房総半一周（2006 年 10 月 15～16 日）〔西部〕奥田正、谷川久美子、坪島迪子〔大阪〕内田宏、岡本雅雄、隅田喜郎、浜田禎三、古里洋聿、三宅茂樹〔中部〕磯貝佳身、竹市年伸、竹市香代子、三浦恒男、吉田哲郎〔東京〕赤川博敏、池田龍夫、板垣勝、岩田健一、大住広人、大久保利一、加藤陸子、坂戸悦偉、鈴木章夫、鈴木敏子、鈴木利人、関千枝子、戸塚和江、戸塚章介、松島守保、山野井孝有

第３３回赤旗まつりで講演する関千枝子さん
＝１９９４年５月５日、辰巳の森）

新聞労連委員長（2010～2012）をされた東海林智さんを囲む夕べ（2012 年 8 月 26 日・いろは）

東海林さんは委員長退任にあたって新聞労連第 120 回定期大会で次のように挨拶しました。

「新聞労連の外にも内にも困っている労働者はたくさんいる。困っている人、泣いている人の涙をふこうではないか。そうでなければ労働組合をやっている意味はない。団結と連帯にしか私たちの希望はない。……『普通』ではない新聞記者として、外野の一番奥で誰も取りに行かない球、こぼれている球を拾いながら思い切り投げ返していく。そういう仕事を続けていこうと思う」

毎日新聞労働組合結成70周年記念のつどい　　２０１６年１２月２９日　毎日ホール

「千枝子のブログ」絶筆

https://ameblo.jp/gomametuusin/

2011 年 6 月 25 日から始めたブログは、この日終りました。

2021 年 2 月 13 日　２月中旬号

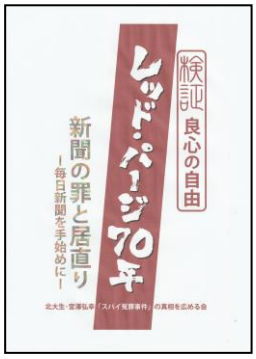
ここ数日、オリンピック組織委員会会長だった（辞任せざるを得なかった）森喜朗氏の失言問題、怒り、あきれ、そして恥ずかしい（世界に）思いでした、もともと森氏の女性蔑視度の高さはわかっていたのですが、今回は、全く問題が分かっていないことがはっきりしました。

「女性がたくさん入って居る理事会は時間がかかる」この発言の蔑視度に気づかず、「解釈の仕方」で「報道が意図的だった」とか、組織委の女性理事は（多分発言されないのでしょう）「わきまえておられる」とか、わきまえない女たちの怒りの声もなぜかわからないようで。困ったものです。

辞任する会長が勝手に会長職を気脈の通じた人に渡そうとしたことも、まったくことが分かってないことの証明でした。とにかく日本の有力者たちが、女性の問題について何もわかっていなかったこと、森さんの様な人を力がある人と大事にしてきたこと、それを容認する社会、本当にジェンダーの問題を主流にとする世界の行き方に日本は逆流していることをはっきりさせてしまいました。あれ、これは森さんの功績かな？　とにかく森さんは」何が何でもオリンピックを開く」という信念のもとで力を発揮してきた。

しかし、オリンピックが今年夏にホントできるのか、私は疑問なのですが。ワクチンだって. その時まで何人接種できるか、さらに世界の状況は、貧しい国でワクチンが間に合うかどうか。強がりを言わず、オリンピックの開催の是非も冷静に考える時ではないでしょうか。

オリンピックを止めた方がいいという意見も増えているときです、無観客にする、規模をずっとちじめるという声もあるそうです。金ばかりが掛かり、普通の都市ではもう開けないと言われるオリンピック。そんなことも考え直してみるべきだし、アメリカの大テレビのために何が何でも８月の猛暑日に開く（暑い暑い国の日本で）それでいいのか、本当にいろいろ考えてみるべき時ではないでしょうか。



関さんは、2020 年末発行の『検証 良心の自由　レッド・パージ 70 年 新聞の罪と居直り―毎日新聞を手始めに』の「意見・感想・問題的」の項に、レッド・パージで毎日新聞を追われた小林登美枝さんのことを書き、毎日新聞記者だった池田一之さんの「レッド・パージから 30 年」と題した記事があることを教えてくださいました。

レッド・パージのこと

関　千枝子

小林登美枝さん

私が毎日新聞に入ったのは 1954 年で、そのころレッドパージのことを語るひとは誰もいなかった。あれは嫌なことで語るのはタブーという空気だった。だから詳しいことはわからない。一度だけさる有名記者のことを「あの人はチクった人だから」と言った言葉を聞いたことがある。

小林夫妻のことは聞いた覚えがある。登美枝さんを薄汚い女とけなした人があり、そうかと思っていたが、40 数年たってご本人にあった時、大変おしゃれなので驚いた。終生、金持ちではなかったから、ぜいたくな服装をしている人ではなかったが、スカーフ、エリマキの類などたくさん持っていらして、亡くなった時、娘さんが驚いておられたことを覚えている。

登美枝さんは、戦後毎日新聞の政治部記者として活躍、当時いっぱい出た女性のための政治社会的雑誌に書きまくっていた。当時女学生（今の中学２年生）の私は驚き、よくわからぬながら、「こんな人がいる」とロールモデルとして尊敬していた。鷲沼登美枝の名はしっかり記憶に残っていた。

それから 40 余年後に初めて小林さんに会うが、これがいつだったか、茅ケ崎に平塚らいてうの碑ができるというので取材に行った時のように思うのだが、そのとき挨拶し、「昔の鷲沼さんでしょう？」　と言ったら驚かれ、また私が毎日新聞にいたことを言うと非常に喜ばれ、以来、会う度に何やかやお話するようになった。

土浦の女学校に通っている時から、新聞記者にあこがれていた。女性の新聞記者は、かなり古くから存在するのだが、伝手があって新聞記者になったというようなケースが多く、女学生で何のコネもない登美枝さんにはどうしようもない夢だった。そのうち、新聞社には速記の仕事をする人がいるという話を聞き、速記者になったが、速記者になっても新聞社に入るのは大変で、めざす大新聞社に入るまで相当時間がかかった。「もともと私は速記は大してうまくないのよ。とにかく新聞記者になりたい、その一心だったの」

東日（毎日）では男性記者が従軍、あるいは召集で姿が減り新聞社は人手不足、登美枝さんは社会部記者として働くことになった。女で記者になれたのだから女のことを取材しようと、戦争に協力させられ、工場に駆り立てられる女性たちの気持ちを取材した。

敗戦のあと政治部記者になり、国会に詰め、国会に陳情に来る女性（地方から来る人も多かった）を取材、記事にした。当時の新聞は小さかったからどの程度そんな記事が載ったかわからないが、登美枝さんにすれば、非常にやりがいのある記者生活だった。

この間、組合運動にも目覚めた。労働組合で大いに活躍、あまり活躍しすぎて不当配転になるが、大変元気で、この頃結婚されたのだと思う。そしてレッドパージが起こり、夫妻共にパージ、夫婦でパージは新聞界でも小林夫妻だけで有名になったという。

パージのことは、新聞社もしゃべらず、パージされなかった人もしゃべらず、パージされた人もしゃべらない、それだけに、毎日新聞の学芸部記者だった池田一之さんが取材に来たときはひどくうれしかったらしい。池田記者が帰るとき登美枝さんが「わー」と泣いたので池田記者もびっくりしたらしいが、登美枝さんも胸がいっぱいになって、とよく言っていらした。私が池田君と友達で仲良くしているというと、どんな人？　と聞いていらした。胸が詰まった思い、なぜと聞いたことはないが、多分くやしさ、これぞ一生の仕事と思っていた仕事を、理不尽に取り上げられたくやしさ、経済的困窮、辛かったろうと推察する。登美枝さんは毎日時代のことを話す時とても楽しそうだった。毎日新聞が大好き、そしてあの政治部時代、本当によき青春時代だったのではないかと私は思っている。

＊

完成した本をお贈りしたところ、2 月 1 日付ハガキで、以下のように感想をよせてくださいました。

レッド・パージが新聞界を襲った意味　　関　千枝子

「レッド・パージ 70 年」ありがとうございました。大住さんが“70 年”にこだわり」、どうしても 2020 年中に出すという覚悟らしいので、そんなの無理じゃない？　と思っていたのですが、さすが剛腕・大住、改めて感心しました。

池田一之さんの記事、覚えている人もなく、なかなか見つからないと聞いて心配していましたが、時間がかかったけれど、見つかって良かったです。でも当時、毎日新聞をやめている私が「（池田さんは）よくレッド・パージのことを書いたな」とびっくりしたのに、大勢の方々が全く記憶しておられなかったこと、ショックでした。

とにかく、小林登美枝さんも、池田さんの取材をとても喜んでおられたので、小林さんの晩年に、よく声をかけていただいた後輩として、この冊子ができたことうれしいです。

私、ほかの新聞社でパージにあい、本当に苦しんだ人知っています。レッド・パージがまず新聞界をおそったこと、その意味を今の方々がもっともっと知るといいですね。“70 年”と言うのは大変な年月ですから。

私が大学に入ったのもあの年。学内はレッド・パージ反対のデモがうずまいていました。大学の闘争、いろいろあったけれど、大学はレッド・パージをくいとめたのですから。

追悼　関千枝子さん

関さん永眠の知らせを受けた方々が、追悼の言葉を書かれています。その中から関さんと毎日新聞で一緒だった先輩の野村勝美さんと牧内節男さん、そしてヒロシマ原爆の悲惨と核兵器廃絶へともに発言・行動されてきた朝日新聞ＯＢ・岩垂弘さんの追悼文を紹介します。

『広島第二県女二年西組』関千枝子さんを偲んで

野村　勝美　毎日新聞ＯＢ

「関千枝子さんが亡くなった」と電話をくれたのは、私と早大露文科で同級だった作家の中山士朗君だった。2 月 26 日の午後 4 時頃。中山君は、私も「浜田山通信」という原稿を書いている「知の木々舎」なるブログに、関さんとの『ヒロシマ往復書簡』を発表し、それらを 2012 年から４巻、西田書店から刊行している。

広島に原爆が落ちた時、中山君は県立広島一中の３年生で 15 歳、関さんは広島第二県女の２年生で 13 歳だった。中山君は勤労動員で建物疎開の作業中に被爆、関さんはその日動員に欠席して死を免れた。

関さんは早大露文科を卒業、私の毎日新聞入社翌年の 1954 年に入社した。２年続けて同じ大学の露文科から記者を採用するというのは、珍しいことだったが、ちょうどソ連との国交が回復し、モスクワ支局要員が必要になった時期だった。

ロシア語使いは、谷畑良三さん（2000 年没、73 歳）だけ。私と同期の平野裕君（のちに東京本社編集局長、東京本社代表）が東京外語のロシア語科を出ていて、谷畑さんの後任は決まっていたが、１人だけでは心細いのでスペアが必要だったわけだ。

しかし、終戦直後の早稲田のロシア語科はひどいもので、教授陣もロシア語を習い直すような有様のうえ、学生運動も花盛りだったため、語学の方はさっぱりだった。

１年たって学制が変わり、あらためて新制大学となり、中山君たちは、大挙？して露文科に入ってきた。予科にあたる早大高等学院時代はロシア語専修を目指すのはたった７人。うち新制大学に入ったのは、３人だけだった。

中山士朗君も新制大学入学で、確か 35 人ばかりいたように思う。うち広島出身が３人。何故か１人も当時盛んだった学生運動に加わらなかった。

関さんは次の年に露文科に入学した。だからロシア語もある程度（などというと憤られるかな）できるはずだと思う。

関さんは旧姓富永という。当時「死んだはずだよお富さん」なる流行歌が大はやりで、彼女ももっぱら「お富さん」と呼ばれた。

彼女はそれが嫌だったに違いない。彼女は毎日新聞同期入社の関元君に恋をし、いま上皇后になったミッチーブームの取材をこなしながら自分たちも結婚することになった。

関君はニューヨーク支局に派遣されることになり、彼女は別居するのがいやで、会社をやめ、ニューヨークに行った。

ところが関君の方がユニセフの仕事に興味を持つようになり、社をやめることになる。

結局は、彼女も帰国して 80 年から「全国婦人新聞」に入り、編集長として活躍した。

この間、ライターとしても活躍した。日本エッセイストクラブ賞を受賞した『広島第二県女二年西組―原爆で死んだ級友たち』（ちくま文庫）は、高校生の修学旅行の副読本としても使われ、ベストセラーを続けている。

中山士朗君も次々に原爆をテーマにした小説を発表、『原爆亭折ふし』（西田書店刊）が日本エッセイスト・クラブ賞を受賞した。

関さんはことしも核廃絶、平和、憲法、ジェンダーについて頑張っているとの年賀状をくれ、「浜田山通信、怒っていますね。楽しみに読んでいます。この頃は中山さんにコピー送ってあげています」と追記があった。享年 88。

役立たずの私は、あと３カ月で 92 歳になる。申し訳ない気もするが、一度きりの人生、最後までがんばりましょう。

（「毎友会」ホームページ追悼録＝2021 年 3 月 3 日）

「銀座一丁目新聞」銀座展望台

牧内　節男　毎日新聞ＯＢ

▲毎日新聞の訃報欄に毎日新聞社会部で活躍した関千枝子さんの記事が掲載された。肩書は作家であった。ネットで見ると、広島の被爆者でノンフィクションライターの関千枝子さんが 21 日、出血性胃潰瘍のため東京都品川区の自宅で死去した。88 歳。大阪府出身。葬儀・告別式は近親者のみで行う。喪主は長男誠氏とあった。彼女には代表作「広島第二県女二年西組」があり、各地で被爆体験を証言する活動をしていると聞いていた。

関千枝子記者（当時は旧姓の富永であった）が「皇太子妃取材班」の一員であったことはほとんどの人が記憶にないであろう。

昭和 30 年のはじめに社会部に「皇太子妃取材班」が設けられた。今の上皇様が皇太子時代の話である。この時、毎日新聞はいち早く皇太子妃になられる正田美智子さんをキャッチ、正式発表の昭和 33 年（1958 年）11 月 27 日に特別号外を発行した。其れも８ページにわたる異例の号外であった。世間をあっと驚かせた。この報道に対して取材班一同に「毎日新聞社長賞」が贈られた。

その時のメンバーは杉浦克巳社会部長、柳本見一副部長、藤樫準二、桐山真、清水一郎、藤野好太朗、古谷糸子、関千枝子、牧内節男の９人であった。９人の活躍については「毎日新聞百年史」に詳しい。関千枝子がなくなったので当時のメンバーは牧内一人だけとなった。（［銀座展望台］2 月 28 日）

原爆被害を訴え続けた関千枝子さんを悼む

歴史に残る『広島第二県女二年西組』

岩垂　弘　朝日新聞ＯＢ

原爆で斃(たお)れた旧制女学校の級友たちに代わって核兵器の残酷さとその廃絶を訴え続けた被爆者でフリージャーナリストの関千枝子さんが、2月２１日、出血性胃潰瘍で亡くなった。８８歳だった。原爆炸裂から７６年。また１人、かけがえのない「原爆の語り部」を失った。

友人からの知らせで関さんの逝去を知ったのは２月２６日だった。私が関わっている市民団体の会員交流のためのメーリングリストに載った関さんの投稿を昨年暮れに読んだばかりだったから、私にとっては、その訃報は、文字通り急死に思えた。

関さんは大阪生まれ。広島市の広島県立広島第二高等女学校(広島第二県女)二年西組に在学中の１９４５年８月６日、自宅にいて原爆を浴びた。早稲田大学文学部露文科卒業。毎日新聞社に入り、社会部、学芸部の記者を務める。次いで、全国婦人新聞の記者、編集長を務めた後、フリーのジャーナリストになった。

当初は無名だった関さんの名が知られるようになったのは、彼女が１９８５年に『広島第二県女二年西組――原爆で死んだ級友たち』を筑摩書房から刊行してからだ。同書は、第３３回日本エッセイストクラブ賞や日本ジャーナリスト会議奨励賞を受賞し、一躍脚光を浴びる。

この本は、関さんが学んでいた広島第二県女二年西組が原爆で「全滅」するまでの記録である。

あの日(１９４５年８月６日)、広島第二県女二年西組は広島市雑魚場町(現国泰町)の市役所裏で行われていた建物疎開作業に動員された。同組の生徒は４５人だったが、うち３９人が教師３人とともに作業に参加し、残り６人は病気などで欠席した。生徒たちの平均年齢は１４歳。

作業現場は爆心地から１・１キロ。原爆炸裂によって、39 人の生徒のうち 38 人がその日のうち、あるいは２週間以内に死亡、残る１人も 24 年後にガンで早世した。引率の教師３人も死亡した。

関さんもこのクラスの一員だったが、前夜から下痢が続いていたため作業を欠席、自宅で寝ていて被爆した。

それから 32 年後の 1977 年、関さんは、亡くなった級友たちの 33 回忌法要の集いを開く。遺族が語る話に耳を傾けていた関さんはこう決意する。

「この集いで、出席された遺族の人びと全部に被爆の模様を語って頂いた。どの話も胸を締めつけられるように悲しく、痛ましく、一人の生命が、その家族にとってどんなにかけがいのないものであるかを痛感した。私は、遺族の話を反芻しながら、二年西組の被爆記録を残さなければならないと決意した」(『広島第二県女二年西組――原爆で死んだ級友たち』の「あとがき」から)

さらに、関さんは 2010 年 11 月９日付朝日新聞のインタビューで、こう語っている。

「(あの日)私は下痢のため自宅で寝ていて、けが一つ負いませんでした。夢に現れるのはあの朝、私を呼

びにきた級友の声です。『運がいい子』と呼ばれるのが重荷でした。級友の遺族を訪ね、一人一人の最後の様子を記録に残そうと思ったのは、被爆三十年後、『申し訳ない』」という気持ちを前向きに変えるためです」

「１人だけ生き残ってしまった 」。そうした負い目が、関さんをして斃れた級友たちの被爆記録の作成に向かわせたということだろう。

本書の完成まで８年間かかった。そのことについて、関さんは「はじめたころ、まだ子どもも小さく、費用の関係もあり、ほかの仕事の合間を縫い、毎年八月六日に広島に行き、その前後、数軒ずつ遺族にお会いしていた。そんなことをするうち、いつの間にか八年の月日がたってしまった」と述べている(『広島第二県女二年西組――原爆で死んだ級友たち』の「あとがき」から)

でも、関さんはこの本を出版した後も、毎年、“広島詣で”を欠かさなかった。私は 1967 年以来、毎年、８月６日を広島で迎えることにしているが、いつも広島で関さんの姿を見かけた。それは、広島市主催の平和記念式典の会場であったり、反核平和集会の会場であったり、街頭であったりした。そして、この日夕暮れの元安川の岸辺には、必ずと言ってよいほど関さんの姿があった。毎年、この川で、原爆死没者慰霊のための灯籠流しが行われるからだった。

近年、関さんは歩く時、足を引きずり、杖をついていた。膝を痛めていたからと思われる。それでも“広島詣で”はやめなかった。

加えて、一昨年春には大腿骨を骨折して３カ月の入院を余儀なくされた。それでも、昨年の８・６には広島へ出かけた。新型コロナウイルスの感染が拡大したため、平和記念式典の規模が縮小され、原水禁関係団体の大会や集会も大半が中止になったにもかかわらず、である。

彼女は、どんなことがあっても、８・６には、原爆で亡くなった級友たちに代わって広島で「核兵器廃絶」を叫びたかったのではないか。なぜなら、先に引用した 2010 年 11 月９日付朝日新聞のインタビューの中で、彼女はこう述べていたからだ。

「級友の死を本当の犬死にしない唯一の方法は、核兵器を廃絶し、恒久平和を打ち立てることだと思います。級友の声が私の耳から離れるとすれば、それは『核廃絶の日』でしょう」

「平和・協同ジャーナリスト基金賞贈呈式であいさつする関千枝子さん。右は受賞者のフォトジャーナリスト・山本宗補さん＝2013 年 12 月 14 日、日本青年館で、中村易世さん撮影」

核兵器に対してだけではない。関さんは、戦争や平和憲法改定につながるものは絶対に許せなかったようだ。例えば、安倍晋三首相が靖国神社に参拝したのは憲法が規定する政教分離の原則に反するとして、2014 年に全国の戦没者遺族や宗教者らが首相と国、靖国神社を相手取って訴訟を起こした時、関さんは、その原告に名を連ねた。それも、筆頭原告として。

平和問題や原爆問題に関心をもつジャーナリストを育てることにも熱心だった。そのためだろう。「平和」と「協同」のためにペンをとるジャーナリストを増やすための活動を続けている「平和・協同ジャーナリスト基金」が、毎年暮れに東京で催す平和・協同ジャーナリスト基金賞贈呈式には必ず姿をみせ、受賞者に向かって「これを機にますます頑張ってほしい」と呼びかけた。

関さんのご冥福を祈る。

（「リベラル 21」2021 年３月３日）

****

＜追悼アルバム編集後記＞

関千枝子さんは、1954 年 4 月に毎日新聞東京本社編集局に入社し、支局勤務を経て 56 年 2 月社会部、59 年 5 月学芸部、62 年 8 月東京本社ラジオテレビ部、67 年 5 月に退社されました。初めてお会いしたのは、61 年 8 月に新聞労連青年婦人協議会で山中湖に行った時以来ですから、60 年になります。印刷局活版部だった私とは仕事上の接点はなく、退社されてしばらくの間はお会いすることはありませんでした。しかし 1985 年に「広島第二県女二年西組」を出されて以降、竹内良男さん主宰の「ヒロシマ連続講座」を紹介してくださり、「検証　レッド・パージ 70 年」発行にあたっては、貴重な証言と助言をいただきました。そして、今年 2 月にもバレンタイン・チョコが届きました。

関さんの厳しさと優しさを思い起こし、かみしめつつ、心からご冥福をお祈りします。

福島　清（毎日新聞 OB）misuzuya@jcom.zaq.ne.jp